

豊明希望チャペル礼拝

2026/9/20

「神があなたにして下さった」

ルカの福音書 8：26～39

今日は、その名をレギオンと言われる人の癒やしと解放の記事です。



前回、イエス様がガリラヤ湖の西のユダヤ側から舟が出て、湖が荒れた記事から教えられましたが、今日は、舟を出した当初の目的であった、東のゲラサの地がその舞台です。

(←ゲルゲサ＝ゲラサ)

今、パウロの異邦人伝道のはじめを見ておりますが、サムリア以外では、ユダヤ人でない、いわゆる異邦人の地は、はじめての箇所です。異邦人伝道は、パウロ、ペテロから始まったのではなくて、イエス様だということに、この記事が取り上げられることがある、そういう箇所でもあります。今日の

最初の聖句です。

「8:26 こうして彼らは、舟で、ガリラヤの反対側にあるゲラサ人の地に着いた。」

イエス様たちを迎えたのは、ユダヤ人がいかにも考える、まさに、ザ・異邦人の地でした。異邦人の地第一歩は、まさに、ザ罪人の歓迎であり、悪霊の出迎えでした。

「8:27 イエスが陸に上がられると、その町の者で、悪霊につかれている男がイエスを迎えた。彼は長い間、服を身に着けず、家に住まないで墓場に住んでいた。8:28 彼はイエスを見ると叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。「いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。お願いします。私を苦しめないでください。」8:29 それは、イエスが汚れた霊に、この人から出て行くよう



に命じられたからであった。汚れた霊はこの人を何回も捕らえていた。それで彼は鎖と足かせでつながれて監視されていたが、それらを断ち切っては、悪霊によって荒野に駆り立てられていた。8:30 イエスが「おまえの名は何か」とお尋ねになると、彼は「レギオンです」と答えた。悪霊が大勢彼に入っていたからである。」



少し、デフォルメした絵 (←) ですが、ユダヤ人が恐れ、おそらく、同行したイエス様の弟子達が抱いていたイメージは、それは、恐ろしいものでありましてでしょう。より正確に言うと、当時、異邦人の地に住む種類の、ユダヤ人も暮らしていたようですが、ここで起きた出来事は、実に、

悪霊の支配する地であり、また、ここに墓場と書いてありますが、生きている者が近づきたくない、まさに死者の地でした。

「その町の者で、悪霊につかれている男がイエスを迎えた。」のです。

マルコの福音書にも、この記事があり、ルカの福音書とほぼ同一の記事となっています。印象的なのは、聖書が、人々が避けて通りたい、事実、この男は、墓場に鎖で繋がれて、さらに逃げないように、見張りがついているわけですが、そういう扱いを受けていたこと、この男が、どういう境遇であったかが、比較的詳しく書いてあるということです。この男について、黙想したいのです。

「長い間、服を身に着けず」「家に住まないで墓場に住んでいた」「鎖と足かせでつながれて監視されていた」(：29)「(鎖を)断ち切っては、悪霊によって荒野に駆り立てられていた」そういう人間でした。

この男について黙想していただけたでしょうか。

お話としては聞けますが、実際のそのような地で、こんな男がいて、声をかけられたらどうでしょうか。一緒にいた弟子達は逃げ出したのではないのでしょうか。しかし、この男のことを正確に黙想するときに、少なくとも聖書は、この男を「罪人」と呼ばず、罪を犯した罪人であったかも知れないけれども、「悪霊によって」こうなつたと、この男でない第三者、外部からのものによって、彼が、その力から逃れられないで、自分では解決が出来ず、どうしようもなく捕らえられている存在だと言うことがわかります。

そういう見方をすると、実に不幸な男だと見えて来ます。



愛媛県の今治に医者の子として生まれ育った、矢内原忠雄（1893～1961、東京大学総長）は、人格破壊者か、あるいは、精神の不調の人かも知れないと、ことわりまして、たといそうであっても、それは、彼が罪人であったということとは、正確にはイコールではないのだと言いまして、間髪を入れずに、こう言います。「**彼が（たとい）人格破壊者であったとしても、それは、彼の責任ではなく、悪霊が外から働くことで、外から病原菌が入って風邪になったとか、病気になったということと、なんら変わりがないのだと（ここで）聖書は言っているのだ**」と言います。そして、「**精神の不調は、人格とか、まして彼の責任と言うことではないのだ。と聖書は、言っているのだ。**」と言いました。

「わたしの名はレギオン」

レギオンとは、ローマの軍団を指す名称ですが、もちろん、彼の本名がレギオンではありません。親がつけた名は別にあるでしょう。30 節にあるように、それは、たくさん

という意味で、たくさんの悪霊が彼の中に住んでいるという意味だと、彼は言います。悲しいことですが、それが彼の自分に対する認識でした。たとえば、彼がヤコブとかヨハネという名をもっている、もはや親に捨てられ、あるいは、親も、手に負えずに、親のもとを離れざるをえず、たとえばヤコブではなく、レギオンだと彼自身が言わなければならないのは、彼のたくさんの悪霊につかれたという姿をもっともよく表す名前であり、彼のアイデンティティーであり、彼の、極めて正確な、誰よりも正確な自覚でした。

それは、使徒パウロが、「私は以前には、神を冒とくする者、迫害する者、暴力をふるう者であり、「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」という時の、罪人とはわたしのことですよ」と言い、パウロが、自分を指して、**「わたしは罪人のかしら」(I テモテ 1:16)**と言事を重なるようにも思います。もっとも、今日のこの男、彼の場合は、自分の罪と言うより、悪霊のとりこという面で違うのだとは言いましたが、であればこそ、自覚の面では、わたしという人間の闇（やみ）をあいまいにせず、きわめて正確にみつめて、自覚している点に、共通のものを思います。

もちろん、この後、彼に憑依した悪霊がものを言っている場面は出てきます。しかし、彼の人格と無関係ではないようです。彼は、自分の身に起きていることを最初から最後まで、正確に把握しています。もし、悪霊に取り憑かれていただければ、悪霊が取り去られた後、「私に何があったのですか？私は誰ですか？どうしてここにいますのですか？」と、長い眠りから覚めた者のようではありません。

彼は、最後のところまで見ると、自分の身に起きたことを自覚し、まさにパウロのように、この方が救い主であり、私を悪霊から解放して下さる方だ、この人についていきたいと願います。最後のところを読みます。

「8:37・・・イエスが舟に乗って帰ろうとされると、8:38 悪霊が去ったその人は、お供をしたいとしきりに願った。しかし、イエスはこう言って彼を帰された。8:39 「あなたの家に帰って、神があなたにしてくださったことをすべて、話して聞かせなさい。」それで彼は立ち去って、イエスが自分にしてくださったことをすべて、町中に言い広めた。」

パウロが、自分について、(使徒 26:10～)「(わたしは) **多くの聖徒たちを牢に閉じ込め、彼らが殺されるときには賛成の票を投じました。**」と言い、また「**すべての会堂で、何度も彼らに罰を科し、御名を汚すことばを無理やり言わせ、彼らに対する激しい怒りに燃えて、ついには国外の町々にまで彼らを迫害して行きました。**」(使徒 26:10～)と言った如く、私はレギオンと言い、悪霊が、豚の中に移動させられて、悪霊から解放されて、今、まさに救われ事の一部始終を、明瞭に自覚しているからこそ、イエス様も、彼に証させ、彼も自覚的に、**「イエスが自分にしてくださったことをすべて、町中に言い広めた。」**と、人に証言してもらうまでもなく、すべて彼は、傍観者のように、その恵みをただ、一方的に受ける立場のようでこそありましたが、すべてを見た、経験した、体験したままに話すことが出来ました。

イエス様は、彼に、「**あなたの家に帰**」るようにと言われます。町に出て証しをせよとは言われません。町々、さらには、10 都市ある都市国家デカポリスのゲラサ以外の 9 都市にも伝えたのは、その後の彼の意思です。

「彼は・・イエスが自分にしてくださったことをすべて、町中に言い広めた。」

彼の家、それは、彼という人間が、矢内原の解釈に従えば、人格破壊者であり、あるいは（精神的）病気であり、家族にとっては、おそらく死んで欲しいと思うほど、事実・・彼は墓場にしばられていたわけですが、大きな重荷であった、その家に、イエス様は彼に帰れと言われるのです。悪霊につかれて、墓場に暮らさざるをえなかったこと、それは、もちろん、彼にとっても絶望でしたが、わたしは、それは、両親や家族にとっては、もしかしたら、それ以上に苦しく、悲しく、絶望的なことではなかったかと思うのです。

イエス様についていきたいと彼は言います。それは、イエス様こそ本物だと、本物の救い主であられるお方だとの自覚だと思います。しかし、同時に、いたしかたないとはいえ、家族も、回りの者も、彼を手にも負えない者として、まるで、そのまま、そこで、早く死んでくれとでも言うが如く、墓場に縛り付けた、そういう人たちのところに帰りたくはないだろうと思うのです。

でも、悪霊の業というのであればこそ、彼らも、特に家族も、苦しんだのです。彼は、家族に、そして、まわりの人たちにも、私たちには希望がある、こんな不幸な息子でも、こうなれた、どうか喜んでくれ、あなたの息子を喜んで欲しい、イエス様にあるなら、こうなれる、どうか息子に誇りをもって欲しい、喜んで欲しいと、イエス様は、彼に言わせるために、わかってもらうために、あえて、家に帰したのです。彼が家に帰って・・・彼の両親や兄弟は、最初は信じられないと、あるいは疑い、あるいは警戒したでしょう。しかし、彼が、ほんとうに癒され、救われ事を次第に知って、どれほど安堵し、喜んだのでしょうか。イエス様は、一番、心配し、苦しんだ人たちのところに、まずは帰れ、それがあなたの仕事だと、使命だと、イエス様は彼に言われたのだと思います。

今朝、わたしたちは、このことをこそ、特に黙想したいと思うのです。

ちなみに豚のことですが・・・こんな事がありました。

「8:32 ちょうど、そのあたりの山に、たくさんの豚の群れが飼われていたので、悪霊どもは、その豚に入ることを許してくださいと懇願した。イエスはそれを許された。8:33 悪霊どもはその人から出て、豚に入った。すると豚の群れは崖を下って湖へなだれ込み、おぼれて死んだ。8:34 飼っていた人たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や里でこのことを伝えた。8:35 人々は、起こったことを見ようと出て来た。そしてイエスのところに来て、イエスの足もとに、悪霊の去った男が服を着て、正気に返って座っているのを見た。それで恐ろしくなった。8:36 見ていた人たちは、悪霊につかれていた人がどのように救われたか、人々に知らせた。8:37 ゲラサ周辺の人々はみな、イエスに、自分たちのところから出て行ってほしいと願った。」

この話しは、ルカよりも、マルコのほうが詳しいです。豚の正確な数まで書き

ます。マルコの福音書「5:13・・・二千匹ほどの豚・・・」これをルカは割愛します。

強調されているのは、人々が、これを見にたくさん集まってきたことと、そのたくさん集まってきた人たちが見たものです。

それはなによりも、そして、結局、「**イエスのところに来て、イエスの足もとに、悪霊の去った男が服を着て、正気に返って座っているのを見た。**」ということでした。イエスのところに来て、イエス様の足もとに。

すべての解決はイエス様のところに行けばある。すべての、苦しく、悲しく、避けたい、葬りたいと思うほどの、重篤（じゅうとく）な、いや絶望、そう希望はない、絶望とあきらめなければならない問題であっても、解決は、イエス様の下に必ずあるということでもあります。

さて、今週の歩み。

今日は特に、レギオンと呼ばれた男に注目し、彼の心を想像し、弟子達が逃げたとしても、誰よりも決然として、彼の出迎えを受け入れた、彼を受け入れ、寄り添い、彼を救われたイエス様を見ました。今週、このお方が、同時に、私にも寄り添い、必ず救われ導かれることを信じて、この主に従い歩みたいと願います。